

アルコールの健康への影響

大量飲酒は全身のすべての臓器に障害を起こします。その具体例をいくつか見てみましょう。

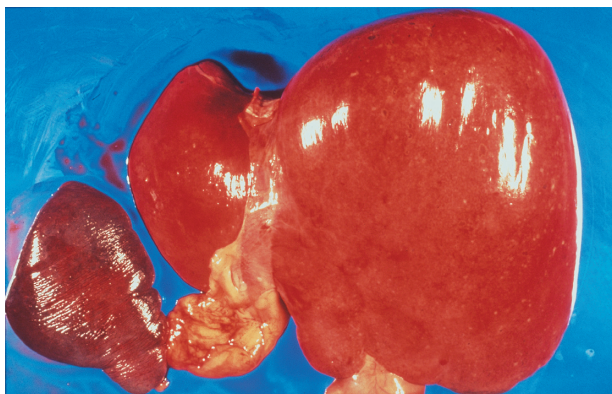


図1. 正常肝臓

正常な肝臓写真です。正常な肝臓は表面がツルツルで柔らかく、赤褐色の大きな臓器です。図の左下に見える暗赤色の臓器は脾臓（ひぞう）です。

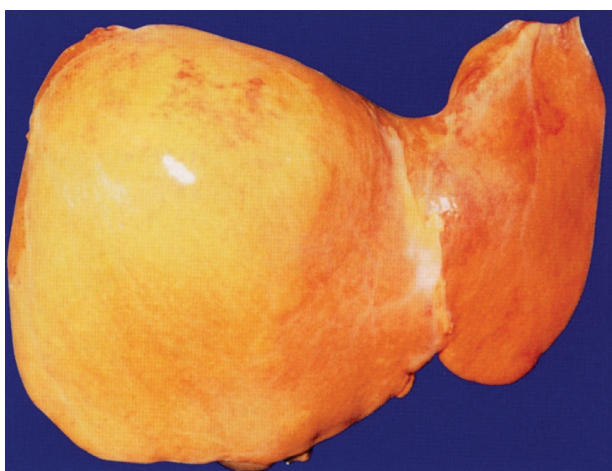


図2. 脂肪肝

大量飲酒により最初に肝臓に現れる変化は、肝臓細胞の中に脂肪が貯まる状態です。大量のアルコール分解にともない、中性脂肪がたくさん作られるためにこの現象は起きます。飲酒とともにとる食物やつまみに含まれる脂肪分のために起きるものではありません。貯まった脂肪のために、肝臓は黄色く見えます。

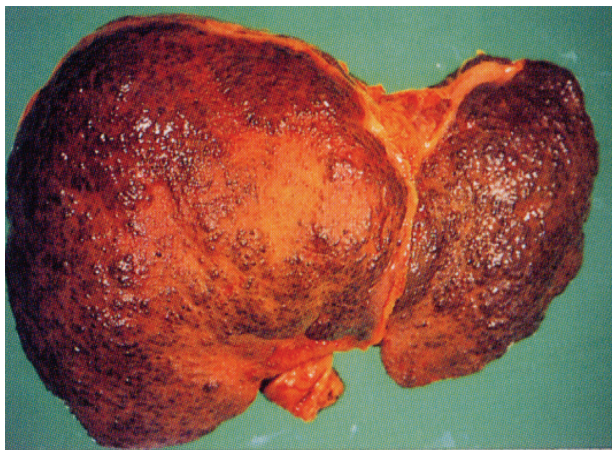


図3. 肝硬変

脂肪肝は、飲酒量を減らすかまたは断酒すれば、もとのきれいな肝臓に戻ります。しかし、飲酒を続けると次第に肝臓細胞がこわされ、魚のすじのような硬い線維（せんい）で置きかわり、肝硬変になっていきます。肝硬変では、小さな細胞のかたまり（左の写真の表面に見える一つ一つのこぶのようなもの）が、肝臓をうめつくしています。アルコールによる肝硬変は、断酒により少しずつ良くなっていきます。しかし、飲酒を続ければ、多くの場合、死に至ります。

図4-1, 2. 食道静脈瘤

肝硬変になると、肝臓内を流れる血液量が減るので、食道の細い血管をバイパスにします。血液が大量に流れるために、この血管が非常に太くなって、食道の内側にはみ出しています（図4-2の白矢印）。これらの血管は壁が薄いので、食物などで壁に穴があくと、大出血を起こします。肝硬変の死亡原因の多くを、この食道静脈瘤の破裂が占めています。

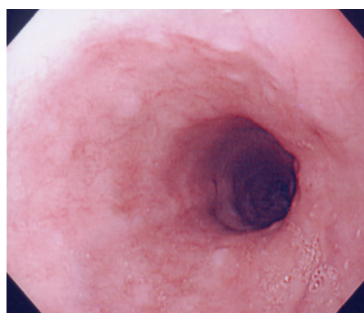


図4-1. 正常食道内面

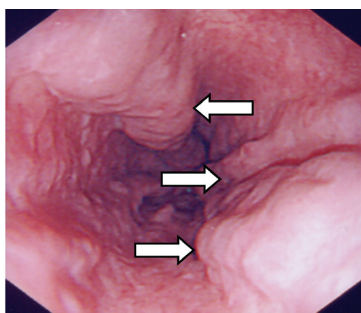


図4-2. 食道静脈瘤



図5-1. アルコール性心筋症
発症前(入院1年8ヵ月前)

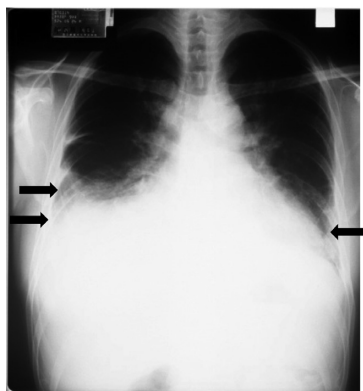


図5-2. アルコール性心筋症
発症前(入院時)

図5-1, 2. アルコール性心筋症

アルコールにより心筋がこわされて心臓の働きが下がった状態を、アルコール性心筋症と呼びます。一般に、大量飲酒後に心不全状態になり、断酒によりまた働きが少しずつもとに戻っていきます。

左の写真は、ある男性アルコール依存症者の胸部のレントゲン写真です。写真の男性は、入院1年8ヵ月前には、心臓の働きに問題ありませんでした(図5-1)。大量飲酒を繰り返したため、入院時には心筋が弱って血液が送り出せず、心臓は大きくなり(心臓肥大)、胸水が貯まっています(黒い矢印)。呼吸困難、両足のひどいむくみ、などの症状が現れます。



図6-1.
健康者の
脳MRI写真

図6-1, 2. 大量飲酒による脳萎縮

大量飲酒を続けていると、神経細胞が速いスピードこわれるため、脳の体積が小さくなり、脳萎縮を引き起こします。左の2枚は脳の断面をみたMRI写真です。一番外側の、白や灰色の部分は、頭の骨(頭がい骨)や筋肉・皮膚です。図6-1(脳萎縮なし)の脳(灰色の部分)は、この頭がい骨の内側いっぱい詰まっており、すき間(黒い部分)はほとんどありません。中央の黒い空洞(側脳室)も、この位の大きさが普通です。これは健康人の脳です。

図6-2は大量飲酒を続けた中年男性の脳です。この脳では、脳と頭がい骨の間にすき間があり、中央の側脳室も大きくなっています。大量飲酒による萎縮は、脳の機能のまとめ役である前頭葉を中心に起きるのが特徴です。



図6-2.
大量飲酒者の
脳MRI写真

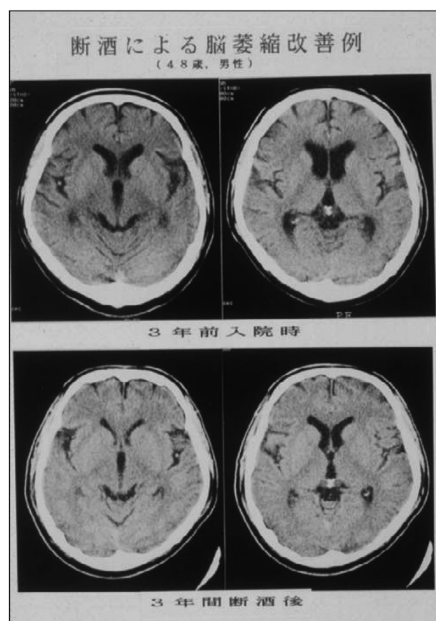


図7-1. 断酒による改善

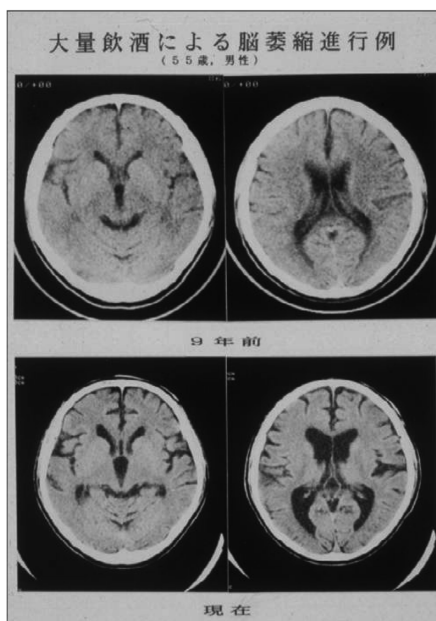


図7-2. 飲酒による萎縮進行

図7-1, 2. 断酒による脳萎縮改善

大量飲酒により一度脳萎縮を起こしても、断酒を続けると、萎縮がもとに戻ることがあります。図7-1は入院時48歳の男性アルコール依存症者の脳の断面です。入院時の脳のMRI写真が上段のパネルの2枚です。3年間の断酒後に撮影したMRI(下段の2枚の写真)では、明らかに脳萎縮が良くなってきています。

しかし、大量飲酒を続けると、脳萎縮はさらに進みます(図7-2)。上段の2枚は、46歳男性アルコール依存症の脳のMRI写真です。大量飲酒を繰り返した9年後にとったMRI写真が下段の2枚です。明らかに脳萎縮が進んでいます。